

学生が主導する教育支援アプローチに関する考察 - ティーチング・アシスタントとラウンジ・コーディネーターの比較 -

野村林太郎*, 永野 直*, 皆月昭則**, 曾根直人***, 林 秀彦***

アメリカの大学から始まったティーチングアシスタント (TA) は講義の円滑な進捗を保つことを目的として始まり、我が国に導入され、日本でも定着しているが、大学教育の充実にむけて、各大学に合わせた実施の在り方が模索されてきている。TA は限られた時間内に対して行われるアシストであるため、TA だけでは学生の希望する要望に対しての教育支援がまかなえない状況がある。本稿では学生が主導する教育支援アプローチ「ラウンジ」活動について説明し、TA と質的に異なる教育支援アプローチについて考察する。いくつかの先導的なプロジェクトとして組織化された類似のアプローチはあるが、学生主導による実践を伴った事例として、それ以外のアプローチは、あまり表に現れることが少ない。我々はラウンジ活動の実施者をラウンジ・コーディネーター (LC) と名付け、鳴門教育大学において実践を伴った研究を進めており、本稿では主に TA と LC の比較から、LC の役割や可能性について論じる。

[キーワード: TA, 学習支援, ラウンジ, 大学教育, 教育制度, 学び合い]

1. はじめに

近年、グローバルな知識基盤社会を迎える中、社会の急激な変動にも対応できる多様化・多角化を含めた社会的な要請として、大学では多様で質の高い教育の実践が求められている[1]。また一方では、学生が情報機器を活用した授業の様子[2][3]から見られるように、学生の習熟状況のばらつきが増しており、教育への対応が複雑化している傾向にある。これらの状況に対して教育の質を向上させるため、大学教育の質の充実に図る取組みが、国の政策としても実施されており、教育に対するあらゆる改革・改善策が試行されている。

例えば、文部科学省の中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 (平成20年) では、「学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)」[1]の「第2節教育内容・方法等 (2) 教育方法」の中で、改革の対策の一例として、「TA等を積極的に活用して、双方向型の学習や少人数指導を推進する。」といった大学が取り組む事例と、国による支援・取組として「TA等の教育支援人材の大幅な増加に向けて支援を行う。」「TA等の訓練等の取組を支援するとともに、各分野でのTA等のより積極的な活用に向けて、各大学に対して環境整備を促す。」ということが記されている。このような取組みは、これまでに多くの大学で既に導入されているティーチング・アシスタント (TA) の機能の拡大として捉えることができるが、多くの大学では今後の展開の仕方が模索されている段階であろう。

TA制度は、アメリカの大学で、講義の円滑な進捗を保つ目的として始まっており、学生に対して手当支給すると同時に責任感を伴わせている。TAは、授業に関する限られた時間内に対して行われるアシストが一般的な業務であり、現状では大学の予算や人員の面から、教員が要望する授業の全てにTAが配置されているわけではない。そのため、TA業務の範囲だけでは、十分な教育支援が実現されていないことも事実である。また、我が国の単位制度が、授業時間外に必要な学修等を考慮して45時間相当の学修量をもって1単位と定めているため授業時間以外の学習も想定されているが、そのような時間の有効活用の側面からの教育支援アプローチについても検討の余地が残されているといえよう。

教育支援については、さまざまな対象があり、例えば、学校教育、家庭教育、地域教育、生涯学習、体験学習、学習相談、学生生活・相談等があり、さらに大学教育に限ったとしても、授業支援、学習支援、生活支援、就職支援、留学生支援等が挙げられる。本稿では、主にTAとの比較からLCの特徴を明らかにするため、TAが授業補助を主な業務としていることから、授業支援や学習支援とその周辺の支援を対象とする。

本稿では、TA 制度とは質的に異なる教育支援アプローチであるラウンジ活動について、LC の活動に着目した実践事例を TA との比較を交えて論じる。

* 鳴門教育大学 大学院 (修士課程) 教科・領域教育専攻 生活・健康系コース (技術・工業・情報)

** 釧路公立大学 経済学部

*** 鳴門教育大学 大学院 自然・生活系教育部

2. ティーチング・アシスタントについて

アメリカで開始されたTA制度が、日本に導入された時期や経緯は明確ではないが、我が国のTA制度は、1992年の文部省高等教育局の策定した「高度化推進特別経費」の中の「ティーチング・アシスタント経費」に、その一端をたどることができる[4]。また、平成7年度の文部省の通達文書に基づくと、TAの制度は、「優秀な大学院生に対して、教育的配慮の下に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会提供を図るとともに、これに対する手当支給により、大学院学生の処遇の改善の一助とすることを目的とする。」とされており、本稿では、これをTA制度の定義として捉える。

上記の定義に基づいて実施されているTA制度であるが、例えば、鳴門教育大学の場合、現職教員が大学院生として所属されている割合は比較的多いにもかかわらず、このような学生には手当支給が難しいため、TAとして採用できない事情がある。優秀な大学院生であっても定義に基づくと実施は困難な状況である。また、教育補助業務の内容は、教員が担当する授業ごとにTAが割り当てられるため、その内容の検討範囲は、自ずと割り当てられた授業を対象とした補助業務に限られる。そのため、予算的にTAを割り当てられない授業については、TAの補助は受けられないことになる。また、学生は、補助業務を遂行する授業に関連した別の知識や技能を身につけていたとしても、業務の範囲は限られるため、自己の成長としてみた場合に、その能力を十分に発揮できない状態も想定される。

3. ラウンジ・コーディネーターについて

3.1 「ラウンジ」活動について

大学教育において、我々は「ラウンジ」活動という取組を試行している。「ラウンジ」活動は、学生が主導して取り組む学習相談等の活動であり、相談のしやすさや、学生と教員の関わり方、活動内容等は特徴的である。ラウンジが形成された背景を以下に記す。

現在の学生は授業内で疑問に思ったことや理解できないことを直接教員に聞く、あるいは自分の意見や希望を教員に積極的に伝えるという行動が苦手である。自分の理解度やスキルに不安を持ちながら、教員に質問、相談するという学生は6割程度でしかない(表1)。これはコミュニケーション力の不足から、「教員に聞く」ということに心的ストレスを感じるというケースや、または、こんな初歩的な質問をしたらくだらない

と思われるのではないかというケースからも示唆される。

このような状態が続くと、前回の内容を理解できず、そのまま授業が進んでついていけなくなり、ついには何が理解できていないかさえも分からなくなるという悪循環が起こる(図1)。特に、1・2年次の導入教育の段階でこの悪循環が起こると後の専門課程の授業の理解や自らの研究活動にも支障を来す事態となり、大きな時間的なロスが生じることになる。

「ラウンジ」とは、上述のような悪循環を緩和するために提案した学生主導型の学習支援である。既に、いくつか実践を報告している[5],[6]。学内に設置した大学の運営するシステムとは異なっており、学生が主導することに特徴がある。

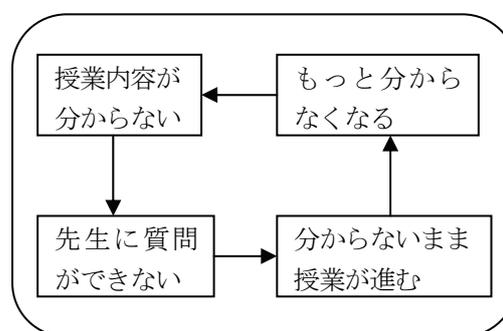


図1 授業が分からなくなるプロセス

3.2 ラウンジ・コーディネーターとは

ラウンジ・コーディネーター(LC)とは、学内に設置したラウンジにおいて学生の学習相談に乗る学生スタッフの事を指す。LCは原則として大学における上位学年(学部のみであれば3・4年次、大学院が存在する大学においては院生を含む。)の学生がボランティアで学習相談に乗るというスタンスが前提である。このスタンスである必要性については以下による。

先輩学生が運営することで、同じ立場や地域で生活する学生のニーズに合ったアドバイスができる。相談者がいつでも来ることができる居心地のよい場所のなかで、学生同士で学習スキルを高め合い、今後の学習・研究活動を自ら主体的に行えるようにすることを目的とする。

ラウンジ・コーディネーターも、教えることによって学ぶという側面があり、学生をつまずき、不安がどこにあるのかをより近い立場から理解し、どのようにアドバイスしたらよいかを学ぶことができる。

3.3 LCの特徴

LCは大学内に存在するが、その存在は大学の運営組織とは分離されている(図2)。また、LCは学生の有志によるボランティア精神によって成立している。

これらの点は、TA 制度と大きく異なる点である。次に LC の活動を取り巻く周囲環境であるが、LC は上記のようにいわば大学の運営組織とは離れた取組であることから、あらゆる協力を受けながら進めることが必要となってくる。そのため、LC に対してある一定の価値を認め、例えば、教員側の心構えとして、講義に対するフィードバックを受け入れることができる状況が必要となる。

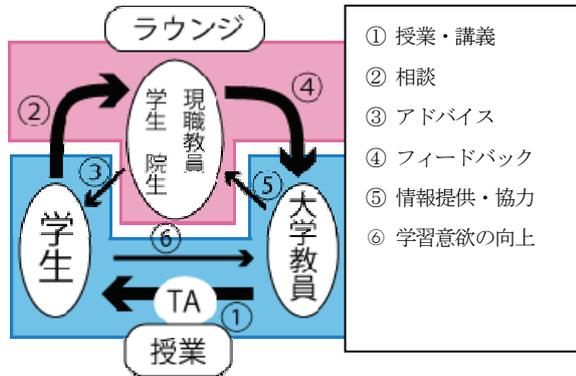


図2 ラウンジの役割

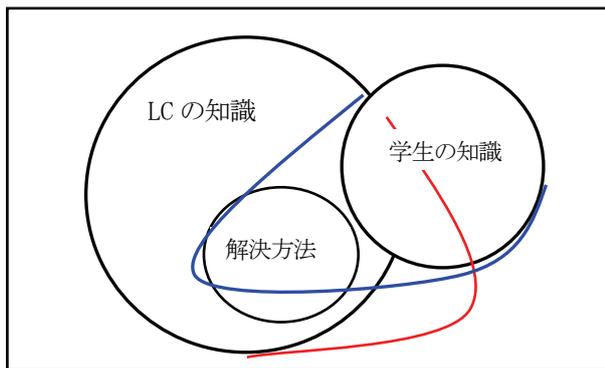


図3 学び合い

3.4 LCの動機付け

3.2でLCの条件にボランティア精神を挙げた。ボランティアの解釈はさまざまであるが、ボランティアは概ね、ボランティアすることへの何かしらの見返りを持って臨むことで成立している。例えば、子ども達の世話を手伝うボランティアの場合、子どもと一緒に遊ぶ体力や時間を割くという行動をしなければならないが、その中で子ども達への対応の仕方を学ぶことができるという見返りがある。同様に他の例では、徳島ヴォルティスの会場設営のボランティアの場合、労働力を提供する見返りとして無料で徳島ヴォルティスの試合を鑑賞することができるといった例も挙げられる。つまり、ボランティアには何かしらの動機付けが必要となってくるといえる。

このような側面からみたLCの動機付けは、LCと相談者との間で交わされる問題解決のプロセス、すなわち、「学び合い」である。「学び合い」の説明を図3に

よって説明する。ある課題に対して解決方法をLCが持っているとしてLCは学生に方法を伝えるとき、学生に分かるように表現方法を変えて伝えていく。また学生はLCの伝えていることを理解するために自分の持つ知識と照らし合わせながら新たな知識を吸収する。LCの知識は学生に合わせて成長、変化し、ノウハウとして蓄積する。また学生の知識もLCという知識の集合体に触れることで成長、変化して行く。ここで特筆すべきことは、両者の知識の成長が解決方法に向けて直線的でなく、含有的な変化をしていることである。これは両者のコミュニケーションの中で直接解決には繋がらないことであっても、お互いに新たな知識を提供し合っている、つまり、これが「学び合い」である。

「学び合い」の内容はシチュエーション毎に異なるものであり、その度に新たな学びが発生する。そのため、LCは相談の度に新たな知見の広がりや能力の発展が期待できる。このような学び合いがLCの動機付けとなっているため、シチュエーションが様々に変化する環境にLCが存在することで、より多くの動機付けがなされ、新たな学び合いを求めるLCの持続効果も期待できる。このような学び合いが動機付けとして成立するのは、教員養成系の大学の特徴であるか、あるいは他の分野においても同様に成立するのは、実践事例が少なく十分な考察がなされていない。しかし、個々の大学にはそれぞれの特徴があるはずであり、それらの事情に合わせた動機付けは可能であると推察される。

4. TAとLCの比較

TA と LC の比較から、LC のメリットを述べる。

その1つは、LC は、授業時間内という「時間的制約を受けることなく、学生の学習相談に乗ることができる」という点が挙げられる。一方、2節で述べたように、TA は、大学との契約による手当支給により、専ら授業補助業務を実施するため、週や月毎に実施時間を定める必要がある。時間外に教えることは手当支給に反映されることはなく、また時間外での対応を迫られたとしても検討の範囲から外れることになる。すなわち、時間的な融通性の高さは LC には及ばず、TA 業務が終わることで TA のモチベーションは原理的に低下することになる。これに対して LC は動機付けとして「学び合う」ことを目的としているため、時間外にモチベーションが下がることなく対応することが可能である。

2つめは、相談者が TA と LC に抱く「距離感の違い」がある。TA については、TA が授業補助を担当する授業については、その授業の受講学生は比較的相談しやすい。しかし、それ以外の事柄（他の授業や生

活等) に関しては相談聞きにくいというイメージを持っている(表1)。

表1:「基礎情報教育」「実践情報教育」履修者アンケート結果

質問項目	回答	数	%
これからの授業やレポートでコンピュータを使いたいですか?	Yes	87	97.8%
	No	2	2.2%
もし、使うとしたらソフトの操作やコンピュータの知識に不安がありますか?	Yes	84	94.4%
	No	5	5.6%
あるとしたら、先生に気軽に質問や相談ができますか?	Yes	59	66.3%
	No	30	33.7%
学生のボランティアでコンピュータの相談に乗ってくれる場があれば行ってみたいですか?	Yes	63	70.8%
	No	26	29.2%
教えてもらいたいことや、やってみたいことがあるらばお書きください。	表計算2,レポート作成,メール1,プログラミング1,ブライントタッチ1,全般1		
その他の意見:先生に質問に行こうとしてもどこにいるかわからない			

意識調査については、例えば2008年度の「基礎情報教育」及び「実践情報教育」の履修者89名に実施した表1のアンケート結果では、3割以上の学生が先生に質問するのが難しいと答えており、また、学生ボランティアの存在に対しての距離感も7割以上が期待していることが分かる。

LCは相談内容の範囲は広範囲におよぶことを想定しており、些細な事柄についても気軽に相談することが可能である。また、そのような環境作りも心がけている。これは鳴門教育大学においてLCが相談を受けた実践を通して分かりはじめてきた新たな発見でもある。それは、立場を決めて相談に乗るのではなく、ゆるやかな関係性の中で「対話の中から解決方法を見出していく」という活動スタイルは、新たな展開や創発があり、大学全体の活性化に影響を及ぼす可能性を秘めている。

例えば、ラウンジでは、学習相談、学生生活の相談のほかに、あらゆる効果を視野に入れたイベントを実施している。国際交流を目的としたもちつき会の実施や、一度は聞いたことがあるが体験したことのないイベントとして、流しそうめん大会等も実施してきた。

参加したメンバーには、学生はもちろん、教員、事務職員も加わっている。参加者の感想には、もちつき会については、次のものがあつた。「専攻しているコースと違うコースの人々と話す機会になって、楽しかった」、「顔は知っているが、話したことがない人と話せて、面白かった」等のコミュニケーションの場として機能していることがある。また、流しそうめん大会については、次の感想がある。「知ってはいたが初めてやった」、「普段の授業で受ける先生の印象とは違って気軽に話せたことがよかった」等の新たな体験が経験を豊かにして人間力を高めたり、教員とも気軽に話せるようになる。これらのイベントを通じて、共通している点は、積極的に人間関係を作るきっかけができることであり、コミュニケーションの機会がラウンジを通じて提供できたといえる。これは、日頃の学習、

生活の基盤を構築する上で重要なことである。このようなイベントの実施はTAでは業務外であるため、LCが先導となって実施することになるという点で、TAとの大きな違いの一つである。



図4 もちつき会



図5 もちつきの様子



図6 流しそうめん大会

また、LCには「ルーティング」のような働きがある(図7)。ここで想定するルーティングとは、LCだけ

では解決できない相談があった場合、LCとは別の外にある外部知識（教員や専門性の高い学生など）に解決方法を求める方法である。

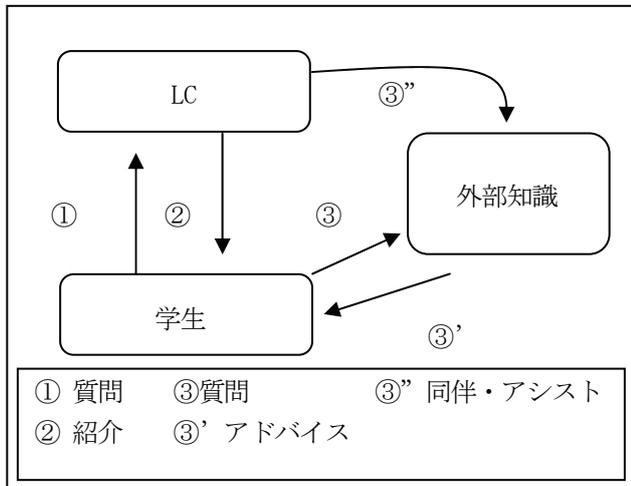


図7 ルーティング

ルーティングの特徴は学生に外部知識を紹介して終わるのではなく、LCも紹介先に同伴し、学生と一緒に学ぶという点である。普段、接している学生の特徴を把握しているLCが同伴することによって、紹介先でもラウンジ効果を発揮し、学びを円滑にすることができる。またLCにとっても、より専門性の高い知識を学ぶことができるため、学び合いによる動機付けがこの場合も引き継がれている。

5. 考察

ラウンジと類似のアプローチは多くの大学で模索されているが、本アプローチは大学の運営とは離れたて実施されるため、学生が主導する形態は表面化されて現れることはあまりないと考えられる。学生が主導することは、実施の機動性、柔軟性等の利点や、学生側の立場にたった意見を取りこみやすいという利点がある。多くの大学がプロジェクトとして組織化することで実施している類似のアプローチは、大学の発案に基づき、学生が参画できるプラットフォームを大学が用意している。一方、ラウンジは、学生の自発性を基本とした活動であるため、大学の用意したプラットフォームを前提としていない。大学の関連部署に学生が相談を持ちかける形で物事が進んでいる。学生は、大学に所属し、コースに配属しているという点では、完全に組織外の活動という意味ではないが、上記の大学のプラットフォームに属する組織と比較すると、大学としては無駄に数多くの委員会を設置する必要もなく、学生の力を育みながら本来の大学のあるべき姿を追求できる。また、学生にとっては、原理的に

は手続きとして、学生のアイデアをそのまま実現しやすいという利点があり、機動性にも優れている。これにより、大学の都合に左右されることも少なく、学生のモチベーションは持続させやすい。大学での活動であるため、大学の各部署との相談に不慣れの場合は、活動を実現するときの手間がかかることもあり得るが、現状では当初の予想に比べてほとんど問題はでてきていない。ただし、実施したいことをどこに聞けば物事が円滑に進むのか判断に迷うこともある。大学の組織編成がここ数年急速に進められているということにも起因しているであろうが、根本的な縦割業務の意識面による弊害もあり得る。これはコミュニケーションを円滑に進めるうえで効果的な改善が必要であることを示唆している。その1つは、ICT機器の利用も期待されることであり、グループウェア等の導入により情報化基盤を構築する方向性は自然な解決方法の1つである。しかし、その導入には、個々の教員、事務職員、学生等のそれぞれの意識に依存しており、意識の相違等を含めて円滑な導入への検討が必要となるであろう。高度情報研究教育センターにおいては、これらの関連する業務の増大は、一時的である可能性はあるとしても、何かしらの対策が必要となるであろう。新たな情報システムが導入されるときにも、ラウンジ活動のように、相談しやすい場があり、あらゆるギャップが埋められることは大学に良い影響を及ぼすと考えられる。

また、本稿では、実施した内容の詳細にはふれていないが、LCは情報機器の取扱いが得意な学生が多く、高度情報研究教育センターと協力することで、センター業務の軽減に期待がかかっている。高度情報研究教育センターには、情報機器に関する諸問題の相談が数多い。その中には、問題の所在がどこにあるのかが不明な状態であることが多く、ラウンジ活動が学生側の諸問題を聞くことで、問題の割り振りが可能となり、センターの窓口業務で生じるロスも低減できると考えられる。また、学生の意識としても、専門的で聞きにくい質問などでも、ラウンジ活動のような親しみやすさを特徴とする横断的な場があることで、気軽に相談ができる。気軽に相談できる場では、新たなアイデアも創出されやすく、大学全体の活性化につながる。

4節のルーティングの説明では、LCをネットワーク構造の視点で捉えたが、LCは多くの人的リソースへのコネクションを持つハブの役割をしており、スケールフリーを実現させている。つまり、ラウンジ活動はLCと参加者を結びつけクラスタを構成していると考えられる。

今後の課題としては、ラウンジのネットワーク構造を分析することで、構造的に支援を構築できるか検討することや、学生が主導するアプローチの欠点を補い、ラウンジ活動のさらなる拡大を図ることである。その学生が

主導するアプローチの課題は、学生の活動状況によって実施状況が左右されやすいことや、大学が実施するプランに比べて、広報に限られた範囲に留まる傾向にある点である。これらは、今後は、LCの層を厚くすることでLCの拡大を図ることや、多くの大学で導入されているようなポータルサイトの活用などICT機器の効果的な活用、認知されつつあるヒューマンネットワークの拡大、広報の範囲を拡大する方法の再検討等によって改善していく予定である。

6. おわりに

本稿では、ティーチング・アシスタントとラウンジ・コーディネーターの比較に基づき、学生が主導する教育支援アプローチについて考察し、ラウンジ活動の特徴を述べた。ラウンジ活動は、学び合いを動機付けとした活動であり、ボランティア精神が大きく影響していることが明らかになった。また、ラウンジ活動を取巻くネットワーク構造は、LCと参加者を結びつけクラスを構成していることが示唆された。

ラウンジ活動が成立する背景には、教員養成を主目的とした大学であることによる多様性を受け入れる土壌が既に構築されていることの影響は大きく、そのような寛大な器があることが大学のユニークな特徴である可能性を示唆している。今後は、実践中の結果を分析し、LCの役割や可能性を実証していく予定である。大学教育を活性化させる点で今後大いに貢献することが期待できる。

参考文献

- [1] 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）報告書，文部科学省，2008.
- [2] 皆月昭則，林秀彦：教科「情報」の必履修による大学における導入授業テーマの検討，鳴門教育大学情報教育ジャーナル，鳴門教育大学高度情報研究教育センター，第5号，pp. 45-50，2008.
- [3] 皆月昭則，林秀彦，安藤俊明，菊地章：教科「情報」成長期への授業実践の実質化，鳴門教育大学情報教育ジャーナル，鳴門教育大学高度情報研究教育センター，第5号，pp. 51-60，2008.
- [4] 子安増生・藤田哲也：ティーチング・アシスタント制度の現状と問題点：教育学部教育心理学科のケース，京都大学高等教育研究，第2号，pp. 77-83.

[5] 野村林太郎，尾崎泰史，皆月昭則：情報の授業におけるラウンジの導入についての研究，平成19年情報教育研究集会，D-45，2007.

[6] 野村林太郎，永野直，林秀彦：学生主導型の情報系サポートシステムー学生同士で学び合う「ラウンジ」活動ー，2008PCカンファレンス，pp. 270-203，2008.